

姫路出身 原爆症研究の父

都築正男 再評価に期待

原爆投下直後の広島に入り、戦後も被爆者の調査と治療に尽力した姫路市出身の医師、都築正男（1892～1961年）。「原爆症研究の父」として知られる都築は約650点に上る「都築資料」を残した。それは被爆医療の基礎資料であり続け、関係者は今も都築の業績に敬意をもって接する。6日、広島は71回目の原爆の日を迎える。（杉山雅崇）



広島、きょう原爆の日

都築は旧制姫路中学（現姫路西高校）を経て東京帝国大に進み、外科医の道歩んだ。原爆投下以前から、やけどと放射線障害の第一人者として知られていた。

東京帝大医学部教授だった1945（昭和

戦後、米国人研究者らと写真に納まる都築正男（後列中央、放射線影響研究所提供）

20）年8月、広島で被爆した女性を治療。同日、東大などの合同調査団の責任者として現地入りし、その後、被爆者の治療と原爆症の研究に尽力した。

広島大原爆放射線医学研究所（広島市南区）講師の宮本達雄さん（38）によると、調査票や書簡からなる「都築資料」は、原爆症に関わる研究者なら一度は目にする貴重なものだという。



都築の業績について話す広島大副理事の山内雅弥さん＝広島県東広島市

「業績もっと知られても」 山内大の

「前例がない原爆症に立ち向かい、詳しい研究結果を残したその業績は評価されてしかるべき」と語る。

「被爆治療に関する文献を調べると、都築の名前を必ず目にする」と話すのは、元中国新聞記者で、原爆医療の歴史について調べている広島大副理事の山内雅弥さん（63）。

都築は広島で積極的に講演などを行い、被爆者に健康診断の受診を呼び掛けた。

都築が没して55年。山内さんは「被爆者を『研究対象』として見ていた面もあっただろうが、原爆症の解明に向け、目の前の被爆者と真摯に向き合った。その業績はもっと広く知られていい」と話す。

都築は1958年、姫路市初の名誉市民に選ばれた。手柄山上の姫路市平和資料館は、都築に関する展示コーナーを設けている。